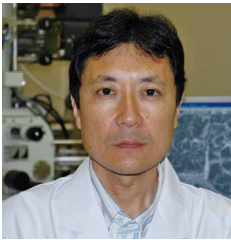


# 書燈

2022年 No. 56



## 館長就任のご挨拶



### 図書館の楽しみ

新田 洋司  
附属図書館長

2018年に本学食農学類に着任しました。2022年4月より附属図書館長を務めています。高校までは郡山で過ごし、その後、県外の3つの大学で学生・教員を経て、36年ぶりに福島に戻ってきました。専門は作物学で、食用となる作物の栽培や品質に関する研究をしています。とくに、おいしい米、品質のよい米の作物機能・形態学的な解析や、イネの栽培制御に関する研究がメインです。いよいよこの3月には所属する食農学類の1期生が卒業です。ワクワクしています。

30年以上前の学生時代の私は、静まりかえった、薄暗い、カビくさい大学の図書館の書庫で、学術雑誌の論文を探して読んでいました。英和辞典を使っても、タイトルの意味すらわかりませんでした。ただ、重要そうな知見や情報はノートに書き留めようとしていました。それとともに図書館では、新聞や雑誌を読んだり、レポートを書いたり、書棚の図書や持ち込んだ文庫本を読んだりしていました。

1990年代後半ごろからは、図書館に情報端末機（パソコン）が入って、図書名や著者名による検索ができるようになりました。厚紙のカードを1枚ずつめくって、目当ての図書や雑誌を探していた時代とは、格段に効率があがりました。その後はさらにネットワーク化や電子化が進んで、現在の電子的で近代的な図書館になりました。

いま私は、家の近くの市立図書館に行ったり、他大学

や学外機関に行ったときには、その大学や街の図書館によくおじゃましています。本学以外の図書館は、図書や雑誌の種類や配架の位置がいつもと違うので、とても新鮮で発見があります。机と椅子があって、読み物があるので、静かにのんびり、パソコンを開いたり自由にできるので、とてもたすかります。私にとって、いろんなところにある図書館は、マルチユーズが可能な、くつろぎのスペースです。

さて、本学の附属図書館の「自慢」をします。本学の附属図書館は、7年前（2015年）に新館が増築されました。書棚から専門書や一般書を取って黙々と読んだり、調べものをしたり、机で勉強したりするスペースはもちろん、仲間や小グループでディスカッションをしながら一緒に学修をする「ラーニングコモンズ」が3箇所にあります。セミナールーム（3室）やスタディールーム（1～4名で利用。5室）も利用可能です。蔵書数は約96万冊もあり、東北地区の大学図書館では第3位です。年間の入館者数は29.8万人（2019年）で、県内の図書館では第1位、学生数が同規模の全国の大学ではトップクラスです。また、学生1人あたりの蔵書数は221.1冊で、86の国立大学の中で11位です。「ふくふくネット」では、本学にしながら福島県立図書館、福島県立医科大学図書館が所蔵する図書を借りることができます。このように本学の附属図書館は、蔵書の種類や数、設備や利用など、全国の大学図書館の中でもとくに充実しています。

図書館、とくに福島大学附属図書館は、とても贅沢で恵まれたスペースです。私は、図書館のゲートをくぐる毎日がとても楽しみです。学生の皆さま、教職員の皆さまの学修や研究、協働ワークに、そして、地域の皆さまの「知恵袋」に、ぜひ、ますますご活用ください。

故郷の三重県伊賀地方の本屋はかびくさい匂いがして古色蒼然とした子どもの本しかありませんでした。大阪市の出身の母から大阪には「本のデパートがある」と聞いていました。小学校1年生の時、念願の「本のデパート」、すなわち東梅田駅の大形書店に連れて行ってもらいました。児童書コーナーは4階にありました。その綺羅星のごとき光景を見たときの感動は忘れられません。

そこで出会ったのが、リンドグレーンの『やかまし村の子どもたち』シリーズ3作でした。スウェーデンの田舎の小さな村に生きる子どもたちとその周辺のおとなたちの日常を描いた本シリーズは、たちまち私を虜にしました。屋根裏部屋、ぼろ織りじゅうたん、手作りのケーキにクリスマスケーキのクッキー、夏のザリガニパーティ…スウェーデンの暮らしにあこがれました。同時に、場所と時代は違っても小学生の女の子が好きなものは共通していて、リンドグレーンという人は私のことがなんでこんなにわかるんだろう、と思ったものです。あまりに好きになりすぎて、一時、距離を置こうと思ったくらいでした。

リンドグレーンの様々な本の他、ノルウェーのプリヨイセンの『小さなスプーンおばさん』ともこの書店で出会いました。そして、リンドグレーンとプリヨイセン両方の作品の訳者は大塚勇三で、以後、私は大塚勇三に絶対の信頼を置き、この人が訳すものは面白い、と、大塚勇三をガイドに本を選んでいきました。

高校生の時、進路に悩んで、大塚勇三さんに手紙を書きました。将来の仕事として翻訳家も考えているのだけれど、という内容だったと思います。勇三さんはそれに返事をくれて、翻訳は技術よりも、その作家、そ

の国が好きであることが大事だ、という内容のことを書いてくれました。翻訳家にはなりません。また、デンマーク語を学ぶ大学に進んだけれどもその後進路変更して臨床心理学の道に入りました。しかしいまもって北欧の児童文学は好きですし、10数年前からデンマークとノルウェーの教育、若者支援、音楽療法についての現地調査を始めることになりました。さら

には自宅に離れを建設し、やかまし村に倣ってその離れに「南屋敷」と命名しました。今に至る北欧との縁をつくってくれたのが、リンドグレーンでありプリヨイセンであり大塚勇三であり、この三者は今も私の読書燈です。

リンドグレーン、大塚勇三について、人間発達文化学類論集に書きました。大塚勇三について書くにあたって、奥様の道さんと手紙のやりとりをさせていただき、その中で高校の時勇三さんにお手紙を書いて返事をいただいた旨お伝えすると、長い翻訳家、文筆家としての生涯の中で手紙に返事を書いたのは、二度だけで、そのうちの一回があなたです、あなたの手紙にはどう返事を書こうか、と

いろいろ考えていたことを覚えていて、と書いてくださったことは大感激でした。

臨床心理学の視点から見たリンドグレーンの生涯と作品

<http://ir.lib.fukushima-u.ac.jp/repo/repository/fukuro/R000005533/16-228.pdf>

大塚勇三の仕事 —子どものための読書ガイドとしての大塚勇三—

<https://ir.lib.fukushima-u.ac.jp/repo/repository/fukuro/R000005590/16-240.pdf>



やかまし村の  
子どもたち  
(リンドグレーン作品集:4)

リンドグレーン作；  
大塚勇三訳  
岩波書店，1965.5

## 「理念と目標」の改訂について

附属図書館運営委員会「理念と目標」策定ワーキンググループ 学術情報課長 木村 勝典

福島大学附属図書館「理念と目標」は、2007年に「多様化する様々な課題・ニーズに対応していくため図書館としての基本方針」として制定され、2019年に一部改訂が行われた。(2019年改訂については、書燈№53参照)

2019年の改訂後、2020年4月に三浦浩喜学長に代わり、同年10月には「福島大学ミッション2030(新学長プラン)」(以下「ミッション2030」という。)が策定された。また、2021年度には、国立大学図書館協会「国立大学図書館機能の強化と革新に向けて(ビジョン2020)」も「ビジョン2025」へ改訂された。さらに2022年度からの国立大学法人第4期中期目標期間にかかる新たな中期目標・中期計画(以下「第4期中期目標」という。)が決定された。

これら状況の変化などを受け、2021年度の附属図書館運営委員会において、これらの策定内容の趣旨や改訂の観点などを踏まえ、「理念と目標」に反映するものはないか、学内外の情勢等の変化への対応と併せて確認・見直しを行うこととし、ワーキンググループ(WG)が設置された。

以降、事前調査や図書館職員からの意見聴取等を行ったのち、WG会議を2回開催し、以下の点に留意しつつ改訂(案)の策定を行い、2022年3月の附属図書館運営委員会の審議を経て制定となった。

### 検討にあたっての主な留意点

- 「ミッション2030」及び「第4期中期目標」については、その基本理念等のエッセンス(例「社会との共創」「デジタル技術の活用」など)を念頭に検討する。
- 「ビジョン2025」については、改訂の特徴とされている「オープン」、「デジタル化への対応」などを念頭に検討する。

### 主な改訂点として

- 「ビジョン2025」改訂の特徴とされている「デジタル化」について、本館としても推進していくため、目標に加えた。**【目標(1)】**
- 「ミッション2030」及び「第4期中期目標」では、特に「地域」や「社会との共創」などが、従来よりも強く意識されており、また、ビジョン2025では「社会・地域の活性化に貢献する。」とされたこともあり、「地域の活性化を支援する」と一部文言を改めた。**【目標(5)】**

なお、今回の改訂で目標に加えた「デジタル化」については、2022年6月から、国文学研究資料館「日本語の歴史的典籍データベース構築事業」(2024年2月まで)に参加し、郷土資料などの古典籍約1,100冊のデジタル化を進めている。また、2023年9月に図書館システムのリプレイスを予定しており、その中で、これらデジタル資料の公開についても検討を進めている。

今後の大学図書館を取り巻く動向については、オープンサイエンスやデジタルトランスフォーメーション(DX)という流れの中で、現在、文部科学省科学技術・学術審議会情報委員会の下に「オープンサイエンス等の動向を踏まえた、これからの大学図書館に求められる役割や機能等に係る事項」を審議事項とする「オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方検討部会」が設置されている。この中で、これからの大学図書館に求められる教育研究支援機能や新たなサービスは何か、これまで果たしてきた機能・サービスについては、どのような変革が求められるか、また、これらの実現に求められる人材、スキルは何かなどについて議論がなされている。本学図書館においても、これらの議論を踏まえた役割や機能などについて検討していくことが必要であり、その結果として、更なる「理念と目標」の改訂が必要となるであろう。

### 福島大学附属図書館の理念と目標

#### ■■ 理念 ■■

福島大学附属図書館は、学術情報基盤を支える図書館として学術情報・資料、教育研究の成果等を広く集積し、快適な利用環境のもとで提供する。蓄積された知的情報資源を活用することにより、地域社会との連携と協力をさらに深めつつ、国内外からのニーズへも対応することを重視しながら、文理融合型の学術研究・教育活動の進展と自律的な学習活動への支援による人材育成に寄与することを使命とする。

#### ■■ 目標 ■■

- (1) 学生の自律的な学習活動と研究者の研究活動を支援するため、資料(図書・雑誌等)や電子的リソース(電子ジャーナルやデータベース等)の整備充実を図るとともに、貴重資料等のデジタル化を推進する。
- (2) 学術情報基盤として教育研究活動を支援するため、ラーニングコモンズをはじめとする施設の整備活用を推進する。
- (3) 利用者の知識や情報の発見可能性を高めるため、学術情報の有効活用と職員等の支援能力の向上を図る。
- (4) 教育研究成果の集積・発信により情報公開の推進と社会に対する説明責任を大学として果たすため、研究成果や学習教材等の電子的流通とオープン化を推進する。
- (5) 開かれた大学図書館として地域の活性化を支援するため、地域社会との連携を図る。
- (6) 東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故を後世に伝え、それに関する教育研究や地域貢献活動の更なる充実を図るため、関係資料を広く収集整理して公開する。

附属図書館運営委員会決定(2022.3.16)

# 附属図書館の施設有効活用について(ワーキンググループ報告)

本学では、附属図書館の運営に関する重要な事項を審議する組織として「附属図書館運営委員会」を設置し、円滑な運営に向けて取り組んでいます。

2021年2月末に福島大学生活協同組合図書館店が閉店し、店舗跡地が空きスペースとなったことや、新型コロナウイルスの感染状況を踏まえた館内施設の利用方法について考えていく必要が生じたことから、2021年度において、委員会内に「施設有効活用ワーキンググループ」を立ち上げて検討を行いました。

ワーキンググループからの提案の概要と今後の対応等について、以下のとおり報告します。

## 1. ワーキンググループからの提案

### (1) 附属図書館1階ラーニングcommons1の拡大【自習空間の拡大】

附属図書館はすべての学類・研究科の学生が利用できる施設である。所属学類・研究科の枠を越えて融合した学びやアイデア形成を行う場、所属を越えた活動・交流を支援する場として、ラーニングcommons1の拡大を提案する。

### (2) 自動販売機による飲み物の提供、カフェの設置検討【知的空間への誘い】

学びやアイデア形成を啓発する場、図書館本体機能のある2階ゲート内へ誘う場としての環境を整備するため、軽飲食の提供やカフェの誘致を提案する。

### (3) 学内外向けの情報の提供【情報空間としての充実】

集いや好奇心を喚起する情報発信の場として、各種展示物の充実を提案する。

### (4) イベント企画の継続・活性化【交流空間としての活用】

上記(1)から(3)を有効に実現し、活発な利用を維持するために、期間限定のイベントや展示などを受け入れることを提案する。

## 2. 学内アンケート調査結果について

ワーキンググループにおける検討の参考とするため、学内利用者を対象にアンケート調査を行いました。学内利用者から寄せられた要望等について紹介します。

○アンケート名称：図書館1階の活用方法に関するアンケート ○調査期間：2021年9月14日～10月11日（Web版は9月30日まで）  
○調査対象：本学の全学生・全教職員 ○調査方法：Googleフォーム及びアンケート用紙（図書館1階入口に設置） ○回答数：118名

### 【アンケート結果からわかった利用状況と寄せられた主な要望等】

#### ラーニングcommons1の利用状況

- ・回答者のほとんどが個人学習の場として利用している
- ・飲食スペースとして利用する学生も多くみられる
- ・3年次生以上ではグループ活動での利用も多い（コロナ禍以前）。注  
注1、2年次生は、新型コロナウイルス感染症対応による利用制限のため、入学時からアンケート調査時まで、グループ活動の場として利用することができない状況が続いていた。

#### 設備・機器等に関する要望

- ・充電設備を増設してほしい
- ・個人用学習席を増やしてほしい
- ・オンライン対応の個室を設置してほしい
- ・コピー機を置いてほしい

#### 今後のスペース活用に関する要望・アイデア

- ・話し合いができるグループ活動の場を増やしてほしい
- ・カフェの設置や飲食スペースを拡大してほしい
- ・各種コーナー（新着図書、おすすめ本、リサイクルなど）を設置してはどうか
- ・企画展示を開催してほしい

#### 図書館内での販売に関する要望

- ・飲食物やコピー用紙等を購入できる売店・コンビニを設置してほしい
- ・自動販売機を置いてほしい
- ・書店スペースを復活してほしい

## 3. 今後の対応について

附属図書館では、ワーキンググループの提案を踏まえ、施設の有効活用に向けた取り組みを進めています。対応可能なものから具体化を図ることとしており、以下については実施済みとなっています。今後も引き続き、より利用しやすい図書館を目指して、施設の有効活用に努めていきます。

- 飲料及び菓子の自動販売機を設置しました。  
(2021年12月1台設置、2022年4月1台追加設置)
- 2022年度からのBYOD（Bring Your Own Device）導入へも対応するため、ラーニングcommons1に電源コンセントを増設しました。(2022年3月)
- 資料展示コーナーの改修を行いました。(2022年9月)

## 展示コーナーリニューアル及び展示報告

図書館1階の資料展示コーナーは、2022年9月末に工事を行い、壁面の色調を統一するなど、新しく落ち着いたのある空間にリニューアルしました。また、この工事の前後には、以下の展示が開催されました。

### ▶ウクライナ写真展「ウクライナを思う」【2022年5月20日（金）～9月21日（水）】

チョルノーベリ原発周辺での研究プロジェクトなどに携わり、度々ウクライナを訪問していた本学環境放射能研究所の難波謙二教授による写真展を開催し、侵攻前の首都キーウの街並みや暮らしが伝わる写真の数々が展示されました。また、これに併せて、募金や図書展示「ウクライナ・ロシアを知ろう！」（新館2F）も行いました。

### ▶「東日本大震災 福島大学の記憶」第4回展示「福島と世界をつなげるグローバル人材育成 Fukushima Ambassadors Program (FAP)」【2022年10月13日（木）～】

このプログラム（FAP）は、世界各国より短期間の留学生を招き、福島県の各地において地域住民や学生等との交流を中心としたフィールドワークを行うもので、2012年から始まりました。福島の本物の姿を知ってもらい、自分ごととしてつながりを持ち続ける「Ambassador（友好大使）」の育成を目指しており、実際の活動の様子や参加者からのメッセージなどが展示されています。



ウクライナ写真展「ウクライナを思う」



「東日本大震災 福島大学の記憶」第4回展示

## 3月16日の地震被害について

2022年3月16日（水）23時36分頃に福島県沖で発生した地震により、福島市では震度6弱の揺れを観測しました。図書館では、前年2月の地震による建物損傷も修繕途中の状態でしたが、今回の地震により新たに3万点を超える資料落下や天井や壁に亀裂が入り破片が落下するなどの被害を受けました。そのため、翌日の3月17日（木）から29日（火）までを休館として館内の安全確認や落下資料の復旧作業を行い、さらにその後、書架を紐で縛ったり資料の位置を棚の奥へずらすといった落下防止対策のほか、書庫内避難経路の再確認などの安全対策も進めました。

また、前年の被害で修繕が途中だった箇所も含め、建物や設備の損壊についても引き続き工事を行っており、書庫内の電動集密書架については、今年度中に全てが手動の集密書架へリニューアルし不具合を解消できる見込みです。

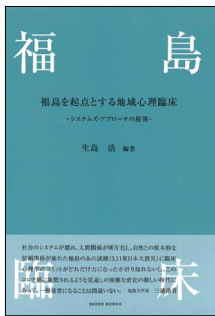


新館2F 資料落下（文庫新書コーナー）



本館2F 天井からの落下物（開架閲覧室）

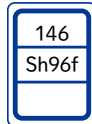
# 学内教員著作寄贈図書



## 福島を起点とする 地域心理臨床

システムズ・アプローチの展開

生島浩編著  
シーズ出版, 2021.11



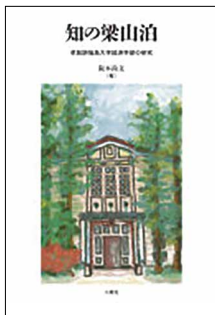
資料ID: 121048047

「福島臨床」と銘打った本書は、編著者が心理専門職養成大学院の教員として20年余り務め、その定年退職を記念して地元出版社から刊行したものです。冒頭に「総論・私の理論と実践—非行臨床における家族支援」を掲げ、システ

ムズ・アプローチ（組織的取り組み）として、地域心理臨床の実践研究の成果をまとめました。「福島を起点とする……」としたのは、私の大学院ゼミ修了生が活躍する、「子どものメンタルヘルス支援」から保健医療、福祉、教育、司法・犯罪、被害者支援、産業・労働の各分野における心理的支援とその論考をまとめたものになっています。

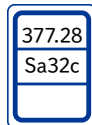
国家資格である「公認心理師」を目指す学生は多いものの、どのような職名により現場で働くことになるのか？ 具体的業務が自らの臨床経験として詳述されています。さらには、東日本大震災・原発事故を経験した福島が抱える臨床的課題は何か、私の小考察とともに考えるきっかけとなれば幸いです。ぜひ、一読をお勧めします。

(人間発達文化学類／生島 浩)



## 知の梁山泊 草創期福島大学経済学部の 研究

阪本尚文編  
八朔社, 2022.11



資料ID: 122030762

本書は、2022年に創立100周年を迎えた福島高等商業学校・福島経済専門学校・福島大学経済学部を主題とする論文集であり、福島大学の複数の学類のスタッフや福島大学経済学部OBの経済学者らが、20世紀中葉の福島大学経済学部の学知とその担い手たちを、経済学史、理論経済学、経

済史、歴史学、法学の各方面から多面的に考察しています。

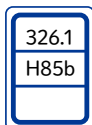
「稀にみる自由な学問的雰囲気」(山田舜)ないし「東北では有名な、稀に見る自由で、しかもアカデミックな気風」(相沢久)に満ちていた当時の福島大学経済学部には、小林昇をはじめ藤田五郎、熊谷尚夫、庄司吉之助、大石嘉一郎、吉岡昭彦、山田舜、星埜惇ら「綺羅星のような」俊英たちが集い、「知の梁山泊」(吉原泰助)の様相を呈していました。やみくもに彼らを顕彰するのではなく、彼らを中心に20世紀中頃の福島大学経済学部で形成された学知がいかなる特徴を持ち、どのような思想的・政治的・社会的な可能性と限界を含んでいたのかという問いに、経済学のみならず、歴史学・法学にまでウイングを広げて取り組むことを目指しました。地方大学の振興や改革にご関心がある方にも、ぜひご覧いただければ幸いです。

(行政政策学類／阪本 尚文)



## ベイス刑法総論

本庄武編著；  
高橋有紀〔ほか〕執筆  
八千代出版, 2022.4



資料ID: 122000402

昭和・平成の法学部の講義では、その道の大御所が著した分厚い教科書を買ひ（買わされ？）、その本のどの頁を話しているのかがよくわからない教員の話の聴くのが一般的であり「法学部らしさ」でもあった。しかし、「タイバ」重視のZ世代にそんな講義は通用しない。令和に入ると、法学部生向けの教科書は薄くなり、「授業」を意識し、「現役」世

代が通説判例を分かりやすく解説するものが増えた。しかし、皮肉なことに、そうした分かりやすい記述が法律学の面白さ、奥深さをかえって体感させづらくしている。

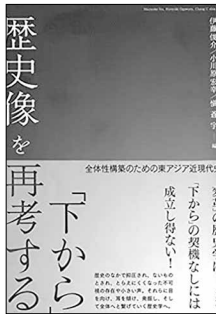
本書も令和の教科書の例に漏れず、通説判例を明快に説明した薄めの本である。ただ、どの章も中堅・若手の執筆者の個性がどことなく反映され、立法や政策による解決を要する話題や、他の学問分野と交錯する話題も多様に紹介されている点が特徴的である。

VUCAの時代と言われる今日、現在の通説判例がいつまでも正しいわけでも、それを以てあらゆる課題が解決できるわけでもない。本書を通じて、現在の刑法の通説判例を正確に理解しつつも、その是非を問い、あるべき結論について学際的に考察することを面白いと感じてもらえたら著者の一人としてうれしく思う。

(行政政策学類／高橋 有紀)

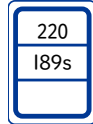
著作資料のご寄贈のお願い

先生方からご寄贈いただいた資料は、新館2Fの「福島大学教員著作物コーナー」等に配架され、本学の貴重な資料として永く保存し、広く学生や地域の方にもご利用いただいております。著作物のご寄贈について、ご協力をお願いいたします。



## 「下から」歴史像を再考する 全体性構築のための東アジア近現代史

伊藤俊介, 小川原宏幸,  
慎蒼宇編  
有志舎, 2022.3

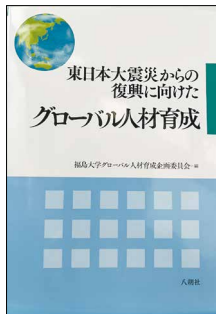


資料ID: 122000922

現在、我々は支配・被支配関係の中でおこる暴力や、社会の矛盾と格差、例えば人種差別や性差別などの差別に満ちた現代社会に生きているが、近年のBLM運動や#MeToo運動などの告発運動の盛り上がりでも明らかな

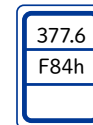
ように、「下から」の告発と実践による矛盾と暴力の克服こそは社会の発展に不可欠となっていこうではないか。論集『「下から」歴史像を再考する—全体性構築のための東アジア近現代史』はこのような問題意識のもと、知識人などのエリートや「国民」を主語として描かれてきた歴史像を相対化するために提唱されてきた「下から」の歴史学を共通のテーマとし、日本史・朝鮮史・中国史を専門とする執筆者による17点の論考から構成されている。本書の諸論考を通して、「下から」歴史学を問い直すことの意義と重要性について議論を深める契機となることを期するものである。

(経済経営学類/伊藤 俊介)



## 東日本大震災からの復興に向けた グローバル人材育成

福島大学グローバル  
人材育成企画委員会編  
八朔社, 2022.3



資料ID: 122000388

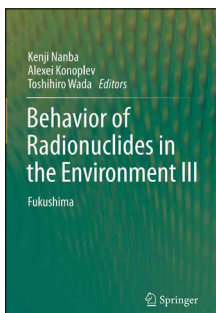
2015年春、ドイツの地方都市のある店でのこと。「福島から来た」と言った途端、愛想よかった店員が息を呑み、顔を強ばらせました。原発事故から4年経っても…、とやるせない思いで店を後にしました。

本書では、このような震災後の10年間に、福島大学生を含む東北の若者達、そして教員ら大人達が、復興や風評被

害払拭のためにグローバルなレベルで活動した様子が描かれています。第1部では三浦副学長(当時、現学長)主宰のOECD東北スクールをはじめとする本学教員のグローバル教育実践例が紹介されています。第2部では経済経営学類の授業担当者とその受講生が、復興に関わって食、観光、若者の消費行動をテーマに3年越しで欧亜北米の数か国でアンケート調査をし、結果を社会に公表した経緯が報告され、そして第3部では経済経営学類の教員と学生が、第2部で扱った3テーマをより学術的に掘り下げています。

若者達が異郷の地で福島を知ってもらうために悩み努力する姿は胸を打ちます。また、日本国内で風評払拭に有効性が高いといわれている、福島食品の安全性検査の存在が、海外では一部の国でしか有効でないことなど、示唆に富んだ内容が多く収められています。

(経済経営学類/吉川 宏人)



## Behavior of Radionuclides in the Environment III Fukushima

edited by Kenji Nanba,  
Alexei Konoplev,  
Toshihiro Wada  
Springer, c2022.



資料ID: 122002460

環境放射能研究所(IER)は2013年に福島大学に設置された研究所です。研究を通じて福島復興支援に資することに加え、国内外研究機関との共同研究を進め、福島で得られる環境放射能についての科学的知見を国内外に共有することを目指しています。震災と原発事故から

11年を経過した2022年3月に、IERの研究者とその共同研究者が執筆した500ページあまりの学術書「Behavior of Radionuclides in the Environment III Fukushima」がSpringerから、製本版と電子書籍として出版されました。内容は、福島での原発事故により放出された放射性セシウムを中心に放射性物質の環境中の挙動を扱っています。対象とする環境過程を大気輸送、土壌-水域、淡水生態系、沿岸・海洋生態系、農作物への移行、陸域の動植物に分け、観測、分析およびモデリングについての研究成果を幅広く紹介しています。この書籍は、環境放射能にかかわるこれまでの研究に基づく経験を、特に国外の現在の研究者や関係者に伝えるとともに、世界の将来世代に伝えるという役割を担うことが期待されます。

(共生システム理工学類・環境放射能研究所/難波 謙二)

## カウンターの内側から

人間発達文化学類 3年 嶋崎 絢

私が図書館でのカウンター業務に就いて約一年半が経過しようとしています。新型コロナウイルスの影響で私が業務に就いたばかりのころには制限されていたサービスも、今では一部再開され、多くの方が図書館を利用してくださることをとても嬉しく感じています。

業務の内容は、資料の貸出や返却、書庫の資料の出納、各施設利用申し込みの手続きなどカウンターでの対応に加え、館内の利用者の状況把握も行っています。

館内の様子をうかがうと、利用者の皆さんそれぞれが、様々に図書館を利用する様子がわかります。セミナールームやラーニングコモンズで友人とともに意見交換を行う人、開架閲覧室で試験やレポートの課題に取り組む人、スタディルームで授業の課題やレポートなどに取り組む人など、多くの方に学びの場として利用されていることがわかります。

また、業務に携わるうえで図書館のサービスを学ばせていただきましたが、改めてそのサービスが充実していることを実感しました。まず私が驚いたのは、蔵書数の



多さです。利用者の皆さんが見ている開架の資料はほんの一部であり、ほとんどの資料は何層にもわかれた書庫の中に並んでいます。さらに、読みたい本や論文が福島大学の図書館に所蔵されていない時は、他大学から取り寄せることも可能です。資料を探すこと以外にも、利用者の皆さんが快適に図書館を利用できるようなサービスの内容は多岐にわたります。読みたい本が見つからないときだけでなく、図書館の利用にあたっての疑問や要望があれば、いつでもお気軽にカウンターにお声がけください。

福島大学附属図書館報

# 書 燈

発行日 / 2023年3月

発行元 / 福島大学附属図書館  
〒960-1293 福島県福島市金谷川1番地  
tel.024-548-8087

<https://www.lib.fukushima-u.ac.jp/>



### 福島大学附属図書館報「書燈」第56号 目次

● 巻頭言 「図書館の楽しみ」	新田 洋司	1
● 思い出の一冊	青木 真理	2
● 「理念と目標」の改訂について	附属図書館	3
● 附属図書館の施設有効活用について (WG 報告)	附属図書館	4
● 展示コーナーリニューアル及び展示報告	附属図書館	5
● 3月16日の地震被害について	附属図書館	5
● 学内教員著作寄贈図書を紹介		
『福島を起点とする地域心理臨床：システムズ・アプローチの展開』	生島 浩	6
『知の梁山泊：草創期福島大学経済学部の研究』	阪本 尚文	6
『ベイス刑法総論』	高橋 有紀	6
『「下から」歴史像を再考する：全体性構築のための東アジア近現代史』	伊藤 俊介	7
『東日本大震災からの復興に向けたグローバル人材育成』	吉川 宏人	7
『Behavior of radionuclides in the environment III Fukushima』	難波 謙二	7
● カウンターの内側から	嶋崎 絢	8

編集  
後記

今年度も校友会からのご支援により、電子ブックや参考図書の購入、さらに、福島民友新聞のデータベース契約をすることができました。今後も、福島大学における学習や研究のために必要な図書館資料の充実を図っていきます。